



2011

キャンパス・コンソーシアム函館
合同公開講座

函館学 2011

第4回講座
講義資料

函館時代の久生十蘭

— 新資料紹介を中心に —

小林 真二 北海道教育大学函館校 准教授

日時：平成 23 年 10 月 1 日（土）午後 2:00 ～ 3:30

会場：北海道教育大学函館校 第 1 講義室

主催：キャンパス・コンソーシアム函館

講師略歴

こばやし しんじ

小林 真二 氏 北海道教育大学函館校 准教授 (日本近現代文学・文化)

1967年長野県長野市生まれ。筑波大学大学院博士課程文芸・言語研究科中退。北海道教育大学函館校人間地域科学課程／国際文化・協力専攻／日本語・日本文化分野所属。

専門は日本近現代文学・文化。研究テーマは坂口安吾を中心に、近現代の笑い文化から戦時下思想、ギャブル文学まで広く扱う。近年では特に、大正期に函館中学校を中退した三人組、長谷川海太郎（谷譲次・牧逸馬・林不忘）、久生十蘭、水谷準の再評価と地元資料発掘に力を注ぐ。三人組関連では、「HAKODATEもだん・ぼーいず」（『北海道生涯学習研究』3号、2003年、北海道教育大学生涯学習教育研究センター）、「もうひとつの北海道文学」（『大学放送講座テキスト北海道の人づくり、地域づくり』2004年、財団法人北海道生涯学習協会事業部学習振興課道民カレッジ事務局）、「林不忘『新講談 丹下左膳』の笑い」（『笑い創造 第四集』2005年、勉誠出版）、『久生十蘭「従軍日記」』（2007年、講談社）など。

F Mいるかの人気番組「暮らしつづれおり」にて「読んで面白い文学案内」（毎月第1水曜 10:15～10:30）を担当。

久生十蘭略年譜

小林真二編

- 一九〇二年（明治三五年）四月六日、北海道函館区（現・函館市）に阿部回漕店の番頭頭の父・小林善之助と母・阿部カンの長男として生まれる。本名・阿部正雄
- 一九一六年（大正五年）函館区立寶小学校高等科を卒業、北海道庁立函館中学校（現・北海道函館中部高等学校）に入学するが、遅くとも三年以内に退学する
- 一九一九年（大正八年）四月、東京の聖学院中学校三年に編入学するが、八月に退学
- 一九二〇年（大正九年）この年までに帰郷。マンドリンとギターのアマチュア演奏家として活躍し始める
- 一九二二年（大正一一年）この年まで中村建築研究所に勤務
- 一九二三年（大正一二年）この年まで函館新聞社の記者となる。以後、同誌に記事や随筆、小説などを発表していく。小説「電車居住者」を発表
- 一九二四年（大正一三年）文芸グループ・生社に参加。以後、機関誌『生』に詩や小説、戯曲などを発表していく。詩「南京玉の指輪」ほか七篇を発表
- 一九二五年（大正一四年）この年までに素人演劇グループ・素劇会に参加。主役を演じたり演出・装置を担当したりする
- 一九二六年（大正一五年）・昭和元年）生社を母体に結成された劇団・蝙蝠座による上演を念頭に、戯曲「九郎兵衛の最後」を発表（※従来は現物未確認）
- 一九二七年（昭和二年）『函館新聞』に設けられた毎月曜文芸欄（文芸週欄）を担当。自らも精力的に創作を発表していく
- 一九二八年（昭和三年）函館新聞社を辞し上京。岸田國士、土方與志のもとで演劇に打ち込む
- 一九二九年（昭和四年）新築地劇団の演出助手・舞台監督を務める。年末から渡仏。国立工芸学校（パリ高等物理学校とも）でレンズ工学を学んだ後、パリ市立（国立パリとも）技芸（工芸とも）学校音楽科に通い卒業した後、後者への入学が縁でシャルル・デュランのもとで演劇を学んだ等といわれるが、真偽・詳細は不明
- 一九三三年（昭和八年）五月までに帰国。一時、新築地劇団演出部に所属し、舞台監督を務める。『新青年』にトリスタン・ベルナルの翻訳を発表、以後同誌を中心に小説や翻訳などを発表していく
- 一九三四年（昭和九年）築地座の舞台監督・演出などを翌年にかけて務める。「ノンシャラン道中記」連載
- 一九三六年（昭和一一年）初め久生十蘭のペンネームを使用する
- 一九三七年（昭和一二年）文学座の結成に参加、以後演出に関わり、同研究所講師も務めるが、翌々年までに離れる。「湖畔」を『文芸』に発表、以後次第に発表誌や作風の幅を広げていく。「魔都」を翌年にかけて連載
- 一九三九年（昭和一四年）「キヤラコさん」、「顎十郎捕物帳」連載。「キヤラコさん」は第一回新青年賞を受け、初の映画化・単行本化をはたす
- 一九四〇年（昭和一五年）「葡萄蔓の束」が直木賞候補となる。国防文芸連盟常任委員兼評議員、大政翼賛会文化部嘱託に就任。「平賀源内捕物帳」連載
- 一九四一年（昭和一六年）博文館の従軍作家として中国に短期派遣される。この頃、劇団冬青座まさきを主宰し、自ら脚本を書くとともに、素人演劇の指導や農村の慰問のため各地を回る
- 一九四二年（昭和一七年）大佛次郎夫妻の媒酌で三ッ谷幸子と結婚。「三笠の月」が直木賞候補となる。「紀ノ上一族」分載
- 一九四三年（昭和一八年）「遣米日記」、「真福寺事件」が直木賞候補となる。二月から海軍報道班員として南方に派遣される
- 一九四四年（昭和一九年）二月頃までに帰国。以後、従軍体験を踏まえた作品を精力的に発表
- 一九四五年（昭和二〇年）初の長篇新聞小説「祖父父ちゃん」を終戦直後まで『北海道新聞』ほかに連載（未完）
- 一九四八年（昭和二三年）「ハムレット」、「予言」が第一回探偵作家クラブ賞（現・日本推理作家協会賞）短篇賞候補となる
- 一九五二年（昭和二七年）「鈴木主水」で第二六回直木賞を受ける。「湖畔」改稿版発表
- 一九五五年（昭和三〇年）「母子像」が第二回世界短篇小説コンクール（『ニューヨーク・ヘラルド・トリビューン』紙主催）で第一席を獲得
- 一九五七年（昭和三二年）一〇月六日、食道がんのため永眠

※本年譜作成に際し、江口雄輔氏「久生十蘭年譜」（『久生十蘭』平六・一、白水社）を始めとする先行文献を参考にさせて頂いた。

※函館時代の新事実（従来の研究で言及されていない内容）については、傍線を施した。北海道教育大学函館校卒業生の久慈千晶氏と、元函館市史編さん室の菅原繁昭氏、渡邊道子氏、元著作権継承者の三ッ谷洋子氏のご教示によるところが大きい。記して感謝申し上げます。

※調査に際しては、函館市中央図書館の郷土資料を大いに活用させて頂いた。

あからひく、旭あさひの昇のぼる頃ころになれば、もう曇あんにじよ如ごととして睡ねむつてはゐられない。紐ニューヨーク育コレッグコレツグ會くわいしや社とくの特ごうだい一ト號大貨物自働車ラツクが、軍用乾麵ぐんよう麵めん、ジグロイン、淋度布りんどふ、死屍しし、マツチ、玄米等々げんまいとうとうを孕はらんで、天てんから繰くりだ出してでも來くるかの様やうに、瀬せを早はやみ、共同長屋アパートメントの兩側れうがわを流ながれ出すからである。

▲電車アパートメント。一三九號ごう。幸さいはいに東京市役所とうけうしやくしよは近いので、ぐうたらべえか病人はつで無い限り、起きぬけに市役所しやくしよの南みなみ口ぐちに並ならびさへすれば、必ず焚たきたての熱あつい握にぎり飯めしを貰もらへる筈はずである。

▲いつもは、すいとん屋やの兼けんさんが、代表だいへうして、貰もらひに行いつたのだけれども、今日けふは兼けんさんが、芝浦しばうらへけんちんを賣うりに行いつたので、私わたしとおたあちやんが貰もらひに行くことになる。

▲おたあちやんは佛英和女學校ふつえいわじよがくの二年生ねんせいで、南佐久間町柳屋みなさくまてうやなぎやさんの長女てうじよである。元來ぐわんらいおちつぴいだから、家がでんぐり返かへるまで書餐ちやわんの茶碗ちやわんを離はなさず、たうたう家が平ひらつたくなつてからダンスの草履ぞうりを一足抱そくかへて、埃ほこりだらけになつて這はひ出した。

▲お父とうさんも、お母かあさんも、扁平へんぺいになつて、竟つひに息いきは吹き返かへさなかつたけれども、おたあちやんは、決けつして、決けつして、吃驚びつくりしなかつたのである。

▲だから、瑛瑯ほうろう引きの飯蒸めしむしを持つて、焚たき出しを貰もらひに行くにしても、鶴見つるみの花月園くわげつえんで、ダンスの休アドミツション 憩きりこに、切子きりこの洋盃コップを持つて、ポンチを汲くみに行くこと程ほどにも考かんがへてゐないのである。

▲勿論もちろん、電車でんしやに居住きよじうする程ほどの人々ひと々は、一日ついたち以前いぜんにはレオン・ブルジョアと稱とへられた階級かいきうに相當そうとうするとは云いへ、階級かいきうの支點してんを握にぎり飯めしに置おいて見みれば、ブルジョアもプロレタリアも、渾沌こんどんとして微みかな差異さいいを痕あとめない。

▲が、隔世遺傳かくせいゐでんに依よる、先天的せんてんてきな胃袋ゐぶくろの大小だいいせうはある筈はずで、餘程よほど早はやいつもりで出掛でかけたのであるのに、代表だいへうの列れつは最早もはや長々と續つづいてゐる。一里いちりも長く續つづいてゐるのである。

▲この行列けつれつは決けつして遊戯ゆうぎでないから、少くともクリツページの様やうに、好きすきな孔あなへ駒こまを進すすめることは出來できない。云いふ迄までもなく、一人ひとりを割わりこり込こめると、それ以下の人間にんげんは、最小限さいせうげん八寸丈はつすんた握にぎり飯めしから遠隔とほのくことであるから。

▲實際じつさい、米こめが飯めしと轉性てんせいするには普通ふつうにさへ少くとも四十分と、及び等々とうとうの形而下けいじか操作そうさが必要ひつやうであることは勿論もちろんで、だから氣きの立たつとして、或あるひは多少たせうの塩氣えんきを含ふくんでらふ握にぎり飯めしはピギスの因果律いんぐわりつに依よつても、左様さやうにぬけぬけと擱つかめない筈はずである。

▲凡おほそ一時間じかんも目白押めじろおしをして、今こんこそ、二人ふたりは完かん全ぜんに彼かれを獲くわく取しゆした。

▲おたあちやんは、温あたかい御飯蒸ごはんむしを、夜會ロオウ、デゴルテ 服むねの胸むねを抱いだく様やうに胸むねに抱いだき、私わたしは右みぎ手に澤庵たくあん、左ひだり手に摧破さいはされた小魚こうをの潮煮しほにを持ち、それに集中しゆくちゆうされる何百なんかの憬あこがれの目めを拂はらひのけ乍なら、朝風あさかぜにふかれ、電アパートメント 車ちや、第一三九號ごうへ向むかつて濶歩くわつぽするのである。

※誤植や阿部の指示に基づかないと推察される不自然なルビについても、原紙のママとした(以下同)。

電車の内房は、考へる程不潔でも清潔でもない。

制動鈎の傍には塵捨箱が備へられてあるし、扉は十全に炊煙を阻止してくれる。只、朝々天井に啓く、房ちやんのお襦袢が想像の臭氣を感じさせる丈のことである。

◆『すいとん屋さんの兼さんは酒が好きで、すいとんが賣れ切れると必ずお祝ひに酒を呑む。彼が呑む焼酎は、腹の中でアドレナリンと化合して。二硫化水素を作るかと思はせる程、その度に必ずふら／＼と軽くなるのである。けれども、例令兼さんが時々兵際に曳ずられて帰つて「開ける、開ける」と怒鳴るにしても、たあちやんも、お時おばあさんも、決して彼には腹を立てない。

◆おたあちやんは、昨日も彼れが、上手に炊いてくれたお味噌の玄米雑炊——而もそれが、陶々亭の揚州炒飯より美味であつたところの記憶に對しても、彼れに充分な好意が持てるし、而も、元來彼女は人懐っこいのである。が、お時おばあさんと兼さんは、原は赤の他人だとは云へ、決して味噌や醬油で繋がつてゐるのではない。

◆其日おばあさんは厠房にゐて夷かに落下する物の音を聴いてゐた。と、突然厠房の小窓が『ピカソの静物』の様に分解され午砲にしては非常識など惟ふ間もあらせず、どでんと裏の小路へ投げ出されたのである。お向ひの二階で、今ヴアイオリンを奏いてゐた所の書生さんの蹠が大梁の下で白くなり、顧みれば彼女が未だ見たことが無かつた、二階屋根の全平面が、すぐ目の下にあつた。忽ちおばあさんは事情を悉知し、屋根の合掌に手をかけて、彼女の倅である陽吉と房ちやんと金比羅さんを交る／＼呼んだのである。

◆が、この時金比羅さんは、二百万以上の細片に分割され、従つて神通力も、その積の平方根に比例して微等分されて了つてゐたし、實は陽吉さんも既にして歪んでゐたことだから、例へばおばあさんが、百万遍も呼んだとしても、與に應へる術を持たなかつたのである。

◆この時、雑多な和聲的附随音の底に、お、懐しい小横笛の主音を聴いた。

◆おばあさんは忽ち身を翻して五寸角の柱を拾ひ上げ、十方無碍に屋根を撃ち初めた。そして、『房や、すぐぞ、耐えてや』と聲を發げた。けれども哀しいことには、物体の質量は加へる力の係数に比例する。事實木は次第に重くなり、間もなく疲れた彼女は六十八才であつたから

◆然しおばあさんもこの對數關係を了解した。即座に角材を捨て、今度は枳を一枚づゝ指で剥し始めたのである。見はるかす火の手は東西南南に起り、仕事は何々捗らない。

◆枳を剥し乍ら、然しおばあさんは泣くのである。そして、これが瓦煎餅であつたらと、ふつと思ふ。思ひなしか、屋根の下の房坊の聲が、次第にかすれ弱つてゆく様に思はれ、彼女は一層の勇猛心——しかし、よろめき乍ら、枳一枚づゝ、一枚づゝの果敢ない精進をつづける。

屋根の下から掘出された房ちやんは、幸ひに何の瑕瑾も無かつた。おばあさんは勿論泣き、房ちやんも勿論泣いた。泣く可き標準は違ふにしても、斯うして泣かれ得るお互が嬉しいのである。

▲おばあさんは人並以上に腰が曲つてゐたから、相交る直角の軸線の一邊に房ちやんを載せ、人が走る方向に規つて、一心にそのそと歩いたのである。

▲尋常である日にも心配で、決して一人歩きをさせられなかつたおばあさんである。まして房ちやんを背にのせてゐるので、重さと焦燥が視覚を變にし、時々思ひ切りよく人に突き衝つては尻餅をついた。

▲火の歩みは、おばあさんのそれよりも迅くて、三度目に起き上つて見たら、目路はろに一人の人影も無かつた。目の前の辨天橋は、今燃え上り、大地は皮膚患者の皮膚の様に嫌らしく膨れ上つた。勿論、引き返すには晩過ぎたのである。

▲どうにもならないこの事實の前に、然しおばあさんは思ひ切りよくあきらめて、再び地に座した。そして、背つた房ちやんを抱き下して緊り胸に抱き、房ちやんの衣服に着く火の子を拂ひ乍ら、こう語つた。

▲『房さんや、ばあさんはもう歩けん、歩いてもどうならうぞ。見や、あつちも、こつちも、あちい、あちいよ。房ちやんものう、ばあちやんも、もう死ぬのぞ。とうちやんも死んだしあきらめて、死のいのう』然し房ちやん丈け助けたい様な氣もするし、又一緒に死んでほしい様な氣もする。が。直ぐぢちも同じ事なのに氣がついてにつこりした。

▲火が唸り出した。——彼の警笛である。二人の坐つてゐる大地は彼れの進行路であつたから然し、今更よばよば立つて歩いたとしても、どうなるものぞ！

観念して、目を閉ぢた。

▲この時、兼さんが現はれたのである。が是は芝居ではないから、花道から番傘をさして來たのではない、彼は観、了解し、早速に房ちやんを背に負ひ、おばあさんを引き立て、前の壕割にぎぶぎぶと割込んだ。

▲通常は腰切りしかない河が、時不知の満潮で、水は兼さんの肩まであつた。自分の命の外に更に二つを預かつてゐる兼さんは既にして不而惜身命である。話の外なる死生の別れ路に、勇ましく七分三分の兼合で踏止まる。

▲火は河を渉る——頭を超えて飛ぶこともあり、罕には水面を匍ふこともある。三羽の鴨は火の引き潮には碌々と首を伸し、火が満ちて來ると命丈けは緊り握つて、水に潜るのである。

▲翌朝、視覚が全然駄目になつたおばあさんを負ひ、房ちやんを擁へて、この電車に連れ入れ、何處から持つて來たか僅かな餛飩粉で、すいとんを練つて喰はしたのである。

◆鶴長鴨短、浪子亦愛慮、で、如何に晩くなつても兼さんは帰つて来る、事實、今扉に觸れるものは正しく彼である。すると、房ちやんが『地震よ、おばあちやん』と金切を發げてじたばたする、房ちやんは三才である。

◆地震と云ふものの實感が、どれ程の振幅を以て彼の神經を揺り動かした知らないけれどもついで二三日前迄は、夜中に少くとも三度は『地震よ、地震よ』をやつたものである。

◆おばあさんは、地震でなく、兼さんであることを説明して置いて手さぐりで戸を開けに行く。扉の彼此でもう話を始める。

『兼さん晩さうござんしたのう』

『おばあさん。飲んだよ』

『いゝのう、元氣で』

兎に角皆起きる。見馴れた顔を然し早く見たいのである。兼さんが蠟燭に火を點ける。が、戸外へ曳れてならない。バケツの底へ立てる。

◆と云ふ間もなく、窓を叩く音がする。灯影を見つけて飛んで來たのである。『何か、火は？何んな種類の火であるか。何の為の火であるかを聞くのである』『消し給へ』で残念乍ら原の暗。目覚むれば、さうさ、私は電車のクツシオンに居たのだ。

◆二万燭光のサーチ・ライトが二分置きに回ぐり回ぐり、その度に中央停車場の八角塔が薄浮彫の様に浮出す。遠くで人の立騒ぐ氣配、又直靜かになる。

緑濃き谿のしぎまに、
黙し立つあれば櫛の樹

◆おたあちやんは今度は、グリンカの『櫛の樹』を唄ふ。恐らくは仰向いて、上海会社のピケットトの空罐に枕して唄ふ——つぶやくのである。

露繁み、日の恵あるとも

一本ならば淋しかるべし。

聲がよるよるとよるけて『淋しかる——』は泣き聲の顫音と消える。

◆私の脊に當るクツシオンが、微に揺れ始める。次第に擡まり振幅を増して來て、竟に啜り泣く聲がきこえる。私は彼女の泣く通りに揺れるのだ。クツシオンの發條に一味疎通があるからである。

：ね、デユ、モンで讀んだのよ。アルベエルと云ふ佛蘭西人がね、北極の、そらなんて云つたつけ、島へね、一人で置き去りにされたんですつて。

▲勿論アルベエルは平氣だわ。佛蘭西人ですもの。煙を吐いて、小さく小さくなつてゆく自分の船にアデイユしながら、氷の上でワンステツプを躍り初めたんですつてだから私、佛蘭西人が好きよ。

▲そのおたあちやんが、今泣くのである。アルベエルは男であつたし、日本人でなかつたから泣かなかつたのである。さもなくば地理や大陸分布に昏くて、自分の現在の状態がどんなものか知らなかつたからである。

◆が、おたあちやんは父も母も亡くしたのである。全く一人である。若し近き未來に、交通機關の健康が恢復して、この電車も動き出す様になつたら、一体おたあちやんは何處で寝ることか、そしてその時、寒い風が吹き霧雨でも降つてゐたら、一体どうしませう——。

今、外は寒い寒い霧雨が降るのである（完）

蝙蝠座上演脚本

九郎兵衛の最後 一幕

阿部正雄

大野遊謙 實は大野九郎兵衛

藤堂左門 遊謙の義弟

(前略)

遊謙 私はけして卑怯ではなかつた。

左門 (懶い眼ざし) ……………

(中略)

遊謙 私は獨りで別な仕方をして來た。

左門 (病的な嫌悪 あゝ、別な仕方をな？ (叫ぶやうに) 貴様は思つたより未練なやつだな。

(中略)

左門、(中略) 遊謙の肩に斬りつける。(中略) とどめを刺さうとする。

遊謙 (手で制して) とどめを刺すには及ばない。この創ではもう助からないだらう。

左門、凝然としてゐる。

遊謙、肩を押へながら、静かに身を起す。晴れ晴れとした顔。風の音。

遊謙 (低いが、しかし明瞭な聲) 左門。お前は、私が此處で何をしてゐたか知つてゐるか？ 知らないだらうね。(和やかな微笑) 私は此處で、上野介を待つてゐただよ。あいつが、お前の殿様を手頼つて、この米澤に落ちて來ると言ふ噂を聞いたものだからね。

左門 (一脈の表情) ……………

遊謙 ……丁度一年半の間、この椽に座りつゞけて待つてゐた。……………(顔を顰める) 辛かつたな。朝來るか。夜來るか……………必ず來るか、それも判つてはゐない。(見開いた瞳) その間ね、たゞの一度も臥床へ入つたことはなかつたよ。……………眠氣がさすと、こうして、壁に凭れて……………(がつくり前へのめる)

(中略)

遊謙 吹雪の日なぞは、せめて簀ぐらひは欲しいと思ふが、それでは噂になるだらう……

……布子一枚で、朝迄吹き曝らされる辛さは……………

左門 あゝ、(動物的な絶叫)

遊謙 ……うつとりとなつてね、そのまゝ落入らうとしたことは、幾度あつたか知れない……………だが、左門、お聴き。これは決して忠義ではない。殿様に腹を切らした、私の些かのお詫びでしかないのだ……………

左門の目から涙が流れる。嗚咽。

(中略)

遊謙 (もう聽えない。何か、幻影を追ふやうに空を睜めてゐるが、突然、絶叫する) おゝ、吹雪だ。吹雪だ。

遊謙、つひに絶え入る。

左門、泣きながら遊謙を揺すつてゐる。

野分の音。

幕。

久生十蘭 おすみめ ブックリスト

◆『定本 久生十蘭全集』(平二〇〇、国書刊行会)

※全十二巻。現在第九巻まで刊行済み。函館時代の作品は第十巻収録予定
☆函館市中央図書館蔵

◆講談社文芸文庫『湖畔 ハムレット 久生十蘭作品集』(平一七)

※「湖畔」「ハムレット」「玉取物語」「鈴木主水」「母子像」「奥の海」
「呂宋の壺」収録

☆函館市中央図書館蔵

◆岩波文庫『久生十蘭短篇選』(平二二)

※「黄泉から」「予言」「鶴鍋」「無月物語」「黒い手帳」「泡沫の記」
「白雪姫」「蝶の絵」「雪間」「春の山」「猪鹿蝶」「ユモレスク」「母子像」
「復活祭」「春雪」収録

☆函館市中央図書館蔵 ☆北海道教育大学函館校附属図書館蔵

◆河出文庫『久生十蘭ジュラネスク』(平二二)

※「生霊」「南部の鼻曲り」「葡萄蔓の束」「無惨やな」「遣米日記」
「藤九郎の島」「美国横断鉄路」「影の人」「その後」「死亡通知」収録
☆函館市中央図書館蔵

◆河出文庫『十蘭万華鏡』(平二三)

※「花束町一番地」「贖罪」「大竜巻」「ヒコスケと艦長」「三笠の月」
「少年」「花合せ」「再会」「天国の登り口」「雲の小径」「川波」
「一の倉沢」収録

☆函館市中央図書館蔵

◆河出文庫『パラノマニア十蘭』(平二三)

※「女傑」号「巴里の雨」「風祭り」「幸福物語」「手紙」「半未亡人」
「田舎だより」「ひどい煙」「重吉漂流紀聞」「ボニン島物語」収録
▲九月に刊行したばかり。まもなく函館市中央図書館蔵となるはず!!

※本講義は、文部科学省科学研究費補助金・基盤研究(C)「大正期函館圏モダニズム文化の研究―長谷川海太郎・久生十蘭・水谷準を中心に―」(課題番号23520206)の交付を受けて行った研究成果に基づきます。